

はじめに

昭和二十五年頃、「クマを、七万円で売ってくれ」と言ってきた人がいた。

しかし、クマを人一倍かわいがっていた母は猛反対。「絶対、売ってはダメ！」と引かない。父が、「七万円あったら山がたくさん買えるのにな」と大きいため息をついていた事を覚えている。

*昭和二十五年当時の大卒初任給は一万三千円程度。

(参考資料：『物価の文化史事典』・展望社) 本文より

私は、田舎に住んでほんのわずかな畑で野菜を作り、一反歩に満たない田に米を作り、晴耕雨読、悠々自適な生活ならいいのだが、清貧に甘んじて贅沢も出来ず、政治に文句を言ってみたり、テレビのバラエティに大笑いしたりと、どこにでもいる普通の親父だ。

では、なぜこんな思い出だけをたよりの拙文を書く気になったのかといえは、多くの狩猟を通して、我が家の犬たちに限らず他の動物たちの行動を良く思い出してみると、我々人間にも教えられることが多いことに気がついたので、是非、読者の方にも知っていただくように思いペンを取った次第である。

いま日本中の田舎の農家で、イノシシ、猿、タヌキ、あらい熊、白ビシン、鹿など、あらゆる動物が畑の作物を荒らして困っている。

自分も少しばかりの野菜等を作っているのだが、イノシシ、猿、タヌキ、山鳥などへの対策で手を焼いている。

思い出してみると、ずい分昔の話になるのだが、今から六十五年くらい前に、我が家にクマとトチという、イノシシ狩りの名犬がおり、そのクマ、トチなどを連れて、猟友会の人たちとイノシシ狩りをして、五、六年の間に大小二百頭以上のイノシシを獲って、村の人たちからも大変喜ばれた時期があった。

愛犬、クマ・トチのことは、私には学業があったため、実際に狩猟に同行した期間は五
〜六年にも満たないのだが、多くの思い出がありその中から特に忘れられないものを書き
出した。

現在、狩猟免許を持っている人は多く無く、特に若い方で実際に狩りをどのようにして
いるのか、知っている方は少ないだろう。このような本に、関心を持って下さる方がい
らっしゃったら、この上ない喜びを感じる。



目次

イノシシ狩りの名犬 クマ・トチの物語
傷を負いながらも戦った猟犬たちへの賛歌

はじめに

一、名犬・クマ、トチの生い立ち

二、クマの誕生

三、クマの初陣

四、クマの修行時代

五、クマの成長と受難

六、クマ、瀕死の重傷

七、クマに重傷を負わせたのは、ホオジロ（頬白）だった

八、樺峠でのクマ

7 8 9 11 13 15 18 19

九、トチの誕生と成長、猛犬へ	22
十、トチ、はじめて単独でイノシシをかみ殺す	24
十一、イノシシを横取りする山師をこらしめる	28
十二、トチ、大ケガ	30
十三、直感の勝利	34
十四、獲物の解体・分配・宴会	39
十五、クマ・トチ、五十キロ超のイノシシを噛み倒した	41
十六、クマにもあった弱点	43
十七、またしてもクマが大イノシシを仕留める	45
十八、大失敗の巻	49
十九、散弾銃の弾丸一粒 対 イノシシ	54
二十、雪山の狩りで守らなければならない事	58

二十一、残念談（その一）	61
二十二、残念談（その二）	65
二十三、クマが山梨県で有名に	69
二十四、クマ受難、ついに一生を終える	74
二十五、稲葉俊夫さん、見事・あっぱれ	78
二十六、トチとの別れ	84
終わりに	87

付 録

鳥の鳴き声／びっくり・感動した、子ウサギの知恵	89
もう一つの親ウサギの知恵／山鳥のオスがメスに餌を食べさせる	
幼鳥を守る母鳥の知恵／心を打たれた、ツバメの親たちの行動	

一、名犬・クマ、トチの生い立ち

希代の名犬だったクマと、その子で超一級の猛犬であったトチの生い立ちは、それを語る前にクマの父犬の事から話さねばならない。

昭和十八年頃は、戦争の真ただ中で、政府からは食糧増産を農家に義務付けしていた時代だった。しかし、その頃の宍原地区は、イノシシが多く出て、手間ひまかけて育てた農作物が荒らされていた。

多くの場合、さつまいも、陸稲、水稲、大豆、そば等の農作物すべてを、たった一夜にして台無しにされる。村人たちもその対策に手を焼いていた。

そんなとき、安部郡玉川村の大和（現静岡市葵区玉川の大和）の豆腐屋に、イノシシを追って素晴らしい犬がいるという話を聞いてきた。

そこで、私の父・大木太六が、安部の玉川に自分が兵役で軍隊に入っていた時の戦友で、海野幸作という人がいるので話をしてもらおうと連絡をとった。

父は喘息の持病があり、あまり思い切ってイノシシ狩りも出来ないもので、後山地区の家の望月静さんという人に仲介を頼んだところ「俺が高くても買うから」と言ったそうだ。後山は四方を山で囲まれているため、宍原よりもイノシシの被害はより多かったようだ。二人が葵区の玉川までどういう方法で行ったのかは聞いていなかった。当時、私が静岡市第一師範学校の一年生だった頃のことだ。

二、クマの誕生

後で聞いた話では、そこで父の戦友の仲介を受け、望月静さんは三百円の大枚を支払って、一匹の黒い大型のオス犬を買って取ってきたとの事。後にクマの父犬となる犬である。そしてその犬で宍原・後山の人たちとイノシシ狩りをやったのだが、犬も主人が変わり、また村の人たちもイノシシ狩りに慣れていないので、いつも逃げられてしまい、成果はなかなか現れなかった。

だが、玉川から来たそのイノシシ狩り犬と、自宅の犬（メス）が交尾して出来た子犬に、胸元が、月の輪熊のように白くて足の先と尾の先がわずかに白いメス犬がおり、それが気に入りに「クマ」（雑種・メス）と名付けて家で飼うことにした。

一年、二年と順調に成長して、キジ、山鳥、ウサギなど何でも良く追うようになり、特にウサギなどは、どこまでもあきらめないで追っていくようになった。

三、クマの初陣

三年目の夏、家の裏山の畑のサツマイモがイノシシに荒らされたのでクマも連れていったところ、イノシシ追いの血が突然目覚めたのか、一生懸命に足跡を嗅いでどんどん奥へ進んで行った。

イノシシの寝場のある山の上のほうへ行くので必死に後について登って行くと、そのうちにワンワンという鳴き声でしたので、これはイノシシの寝場を突き止めたなと思い、狩

りの仲間知らせるため、空砲を一発空に向けて放った。

それからまた下のほうへ追い下げて行くので、自分も下のほうへ走って行くと、クマは、県道を越えた東側の谷で一カ所に止まってワンワンと鳴いている。そっと忍んで近づいて見ると、クマが大きな老木^{*}の根元に尻を据えているイノシシと、対峙しているではないか。そのとき、一緒に連れていったクマとイノシシの距離は、十二、三メートルくらいある。岩石の多い谷間では無く、弾が反射しクマや父犬に当たる心配は無いので、ここぞとばかり、イノシシの鼻先を狙って引き金を引いた。

轟音と共に、イノシシはガクツと前に崩れ折れて動かない。見れば眉間の真ん中に命中していた。うまくイノシシを追い込んでくれた。これが名犬・クマの初陣の手柄だった。

*イノシシは、犬に後ろから足を噛まれると不利なので後ろから飛びかかれないように、追い込まれる場合、大木または大石を背に尻を地面に据えて正面から来る犬を威嚇する。なにも無いところに立ってあれば四方八方どちらからも犬が飛びかかるので、これがイノシシの防御の知恵なのである。宮本武蔵は立木を楯にしたり、または田の畔に立って敵を前後だけにして有利に戦ったと、小説で知ったが、同じようなイノシシの知恵に感心した。